

京都大学大学院文学研究科/21世紀COEプログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

ヨーロッパにおける人文学知形成の 歴史的構図

NEWSLETTER

No. 6

2006/2/15

■ 活動報告

第2回研究会大会は、1月9日の成人の日に、京都大学大学院文学研究科・新館にて開催されました。新年早々のあわただしい時期にもかかわらず、30名以上の方々にご参加いただきました。これまでの成果の総括を目的とした第2回研究会大会では、近代イギリス史、中近世ドイツ史、イギリス教育史をそれぞれ専門としておられる3氏による充実した報告の後（内容につきましては、それぞれの報告要旨をご覧ください）、会場参加者の方々を含め、横断的かつ活発な議論が繰り広げられました。

なお、本研究会は、3月4日（土）にジョン・パタソン博士（ケンブリッジ大学・古代ローマ史）による講演会、3月11日（土）にペーター・ヨハネク教授（ミュンスター大学・比較都市史研究所所長）を迎えた国際セミナーを予定しております（詳しくは本誌掲載のご案内をご覧ください）。これらの講演会、セミナーにもご参集いただけましたら、幸いです。
(阿部拓児)

●第2回研究会大会

日時：2006年1月9日（月曜日・祝） 午後1時30分～5時30分

場所：京都大学大学院文学研究科・新館2階第7講義室

報告：金澤 周作（川村学園女子大学）

「学びを支える社会と力——近代イギリスの教育とチャリティ——」

佐々木 博光（大阪府立大学）

「歴史の科学化、科学の歴史化——ドイツ啓蒙主義と人文学——」

安原 義仁（広島大学）

「近代オックスフォード大学の改革と古典学・人文学の位置

——優等学士学位課程の変遷——」

【報告要旨】

報告 1

学びを支える社会と力——近代イギリスの教育とチャリティ——

金澤 周作

本報告は、18世紀半ばから19世紀後半に至る時期のイギリスを対象としている。宗教改革にはじまり、「ピューリタン革命」および名誉革命を経て、フランスやスペインとの戦争、国内のジャコバイト反乱、と主として宗教の問題をめぐる激しく動いた近世と、民主化、総力戦、そして帝国の清算に揺れた20世紀的な現代とに挟まれた自由主義の近代である。本報告のテーマに則してこれを換言するなら、近代とはまた、古典的チャリティの近世と国家福祉の現代をつなぐフィランソロピー（宗教色のないものをも含む広義のチャリティ）の時代でもあった。

もちろん、古典的チャリティが近代になくなったわけでもなければ現代にチャリティなしフィランソロピーが居場所を持たないわけでもない。しかし、相対的にみて、近代イギリスでは新旧さまざまなチャリティが遍在し、自然化していた。なお、貧者や病人の救済というイメージを結びやすい「チャリティ」は、実際にはそうした《悲慘からの救済》を志向するものと並んで《共同体のさらなる福利増進》を志向するものも含んでいた。そしてこの二つの意味において、教育はチャリティの守備範囲に入ってくる。

それでは、近代イギリスにおける教育とチャリティをどのように問題化することができるだろうか。通時軸を意識して、中世の修道院や大聖堂付属学校に端を発する各種学校の発展史の中で考察する、あるいは共時軸を意識して、近世以降のチャリティの二大財政基盤である基金（endowment）と寄付金（subscription, donation）のシステムに着目して法制史的に分析する——いずれも近代のチャリティと教育を知る上では重要なアプローチだ。本報告では、後者の方法にやや重きを置いて構造的な把握をした上で、近代チャリティ史の文脈に教育を位置付けなおすことを試みた。

まず、近代に存在した教育チャリティを三種に分類、提示した。

- ① **学問**：初等・中等学校としては、比較的富裕な子弟に古典語中心の教育をほどこしたグラマー・スクールやパブリック・スクールがある。だがこれらはいずれももとは「貧しく困窮した学生」のために設立された基金立学校だ。また、貧困家庭の子供に読み書きを教えたチャリティ機関として、チャリティ・スクールや教区学校、日曜学校のほか、非国教系のブリティッシュ学校と国教系のナショナル学校の二大組織があり、それ以外にもさまざまな教育施設があった。高等教育にもチャリティは一定の役割をはたしている。オックスブリッジの諸カレッジは篤志家の残した基金に立脚しているし、新設されたロンドン大学は19世紀のチャリティ便覧に慈善団体の一つとして掲載されている。19世紀後半に地方都市で広まった市民大学（civic universities）の設立にも、地元フィランソロピストの影響が決定的だった。ほかに、図書館や博物館、美術館も基金や寄付金によって運営されるものは少なくなかった。
- ② **技術・訓練**：学問や教養というよりもむしろ直接社会で役に立つことを教える組織も、多くはチャリティによって運営された（当然、医師や弁護士といった専門職の養成はチャリティによらない）。たとえば盲人への点字指導組織や貧しい少女向けに裁縫の手ほどきをする施設、または貧しい少年を有用な船乗り仕立て上げる海洋協会など、ロンドンを中心にきわめて多数の団体が機会を提供していた。

③ **社会教育**：より抽象的なレベルでもチャリティは人々の「教育」をおこなっていた。貧者宅への訪問（慰藉、助言、援助）や街頭・教会・戸口での募金活動、それに直接の施し行為などが実践されるたびに、繰り返しあるべき階級関係が確認された。また、チャリティはつねに、現実には男性のプレゼンスは明らかであるにもかかわらず、女性の領分だと主張された。女性にふさわしいほぼ唯一の公的活動だと規定される分野で善行に励んだ女性たちは、往々にして知らずそのジェンダー規範を内面化した。チャリティの行き先は国内の弱者に限られなかった。ミッションという形をとって、イギリスの人々は帝国のすみずみに救済の網の目をはりめぐらせた。とりわけ、宣教師が与える教育や医療を通じてエスニックな上下関係が強化され、優れたものとしてのヨーロッパ的人文学が英語や聖書知識とともに現地に注入された。

このように一瞥するだけでも教育的なチャリティの重層性は明瞭に見て取れる。たえず増殖し続けるさまざまな慈善的媒体を通して、イギリスの内外に人文知と実用知、そしてイデオロギーが保存・継承されることになった。

次にこれら種々の教育全体の変遷を 19 世紀チャリティ史の流れから捉え返した。ここでは事例の分析を略して結論のみ記す。

教育の向上を阻む弊害の存在を認識する仕方——基金が健全に運営されていない／ふさわしくない対象に恩恵が与えられている——と、その弊害を解消する策の方向性——個々の連携と情報交換による組織化／公権力との提携——は、いずれもチャリティ全体の動きとパラレルであった。教育ないしチャリティがうまく機能しない要因は活動の量の不足ではなく過剰にあると考えられた。しかし、個々の自発的善行を阻害することなど考えられないチャリティ社会にあっては、解決策として、止まらない増加と個別に完結した善意とをネットワーク化によって統制すること、つまり全体の合理性を可能な限り追求する道しかなかったのである。

イギリス教育史には膨大な研究蓄積がある。そこに専門外の者が口を挟むことの危うさは承知している。だが、あくまでチャリティという事象によりそいながら教育を考察することにも一片の意義はあるのではないかと思われる。

報告 2

歴史の科学化、科学の歴史化——ドイツ啓蒙主義と人文学——

佐々木 博光

近代の人文学知の特徴としてその著しい歴史化を挙げることができる。前近代にもおびただしい歴史叙述が編まれた。しかし、それらは学芸のひとつとみなされることはなかった。歴史が学問の一種と認知されるのはようやく近代になってからである。あらゆる人文学知の歴史化という事実が示すように、歴史はひとたび学問と認知されるやいなや一躍中心的な位置に立つことになった。前近代の修辭的な歴史叙述は学問的な知識と認められることはなかったが、実践的や知識として重宝された。歴史は「人生の師」というキケロのことばは前近代一般に通用する。人びとは歴史叙述のなかに模範と仰ぐべき人物を見出し、教訓や処世訓を引き出していたのである。これにたいして、学問的な知識と認められるようになった歴史は、実践性を極度に忌避する傾向があった。いまや実践性を失い単なる学問的な知識と化した歴史はいったい何の役に立つのか。これが世紀転換期のドイツで噴出した歴史主義論争の

核心である。あらゆる人文学知の歴史化が近代の避けがたい宿命であるとすれば、学問的な歴史研究を意義づけるという問題はすぐれて学際的な課題であり、今後の人文学知の行方を占うためにも重要な課題となるであろう。

前近代の修辭的な歴史叙述の伝統が近代の科学的な歴史研究に取って代わられる過程を、史学史家ヴォルフガング・ハルトヴィヒの命名にならい、いま「歴史の科学化」とよぶことにする。「歴史の科学化」から生じた諸問題をよりよく理解するためには、問題の根源にさかのぼり、「歴史の科学化」にどんな力学が働いていたのかを明らかにすることが肝要となる。平たく言うとその歴史はいつどのような理由でこの歴史に取って代わられたのか。そのさい、先述のハルトヴィヒやアンドレアス・クラウスといった史学史研究者はおしなべてこの転機を啓蒙主義に見る傾向がある。筆者はこの理解に大局において同じものであるが、「歴史の科学化」にはふたつの異質な局面があったと考えている。前科学的な歴史叙述の時代には大学にも歴史を考究するための自律的な講座はなかった。「歴史学の講座化」が緒につくのは19世紀のことであった。一見すると「歴史学の講座化」は「歴史の科学化」の必然的な帰結と見えるかもしれないが、ことはそう単純ではない。「歴史学の講座化」を主導した理念は新人文主義で、それは啓蒙主義とはやはり異質な理念だからである。「歴史の科学化」と「歴史学の講座化」の錯綜した関係を解くことが広義の「歴史の科学化」を明らかにするための鍵となる。報告では狭義の「歴史の科学化」の過程を振り返り、「歴史学の講座化」への見通しを展望した。

すでに1901年の論考で、ヴィルヘルム・ディルタイは「18世紀の啓蒙主義が歴史にたいする新しい理解を提示した」ことを指摘していた。彼岸的・魔術的な因果理解が少なくとも公的な場において信用を失い、代わって現世的な因果関係の解説が科学に託された。原因の考察には過去にさかのぼり歴史を研究することが不可欠である。いまや歴史は科学的な営為の基本と認知されるにいたった。ディルタイにおいては、「歴史の科学化」と「科学の歴史化」は表裏の関係に立つものであった。

理念的に把握した「歴史の科学化」を、ディルタイも啓蒙期の歴史家に数える三名の歴史家の言説の考察を通して歴史的に検証した。岡崎勝世がキリスト教的普遍史から科学的世界史への移行を体現した歴史家のひとりに数えるアウグスト・ルートヴィヒ・シュレーツァー(1735—1809)は、1785年の著作で、歴史は「つねに結果を原因に結びつける哲学となる」と述べている。シュレーツァーは伝統的に修辭学の一分野とみなされていた歴史を論理学に帰属させることでそれに学問性を与えようとしているのである。原因にかんする知識となった歴史は、一回きりの特殊な知識という桔梗を脱し、学問的な知識の規範とされた普遍性を得たと考えられたからである。さらに、ルートヴィヒ・ヴァッハラ(1767—1838)の1812年の著作と、トーマス・アププト(1738—66)の遺稿中にある論考を紹介した。歴史叙述の伝統から歴史研究が分出する過程を考察したヴァッハラは、歴史研究は、伝承のための記述や評価とは異なり、「これまでなかったような道」をゆかねばならないという。また、アププトは彼自身の「歴史学のための上申」を、「世界の諸状況を正しく認識しようとするものは、その諸状況がどのようにして因果的に継起したのかを観察しなければならない」と結んでいる。科学的な因果の考察が「歴史の科学化」をもたらしたという認識は、啓蒙期の歴史家の言説にもうかがえるのである。

残った時間で「歴史の科学化」の前史と影響を説明した。人文主義は古文書学、書誌学、古銭学、系図学など現在「歴史補助学」の名で総称される部門の礎を築いた。史実の確定に

重きが置かれるようになり、年代考証の技術も進歩した。この学は最初神学に、その後は法学にも受容された。こうして、シュレーツァーのいうような「共時的・通時的な」時間軸に沿った史実の拡張がはかれる。そうすると、因果理解が現世的な方向でなされるようになるのは時間の問題であった。近世はまだ現世的な因果理解と彼岸的な因果理解が共存できた。しかし、啓蒙期にはもはやふたつの因果理解が両立しえなくなったのである。

つぎに、「歴史の科学化」は「歴史学の講座化」に直結してはいない。「歴史の科学化」は「科学の歴史化」と表裏の関係にあった。そこからは歴史のための自律的な講座を開く積極的な理由は浮かんでこない。講座化のためには歴史研究を意義づける別の論理が必要であった。これは史料への沈潜を新人文主義の陶冶理念に接合する認識によってはかられた。19世紀以降は歴史研究にたいする二つの考え方がたいていは没交渉のまま、時に激しい摩擦を生みつつ併存することになった。一方は因果理解に基礎を置く歴史研究、もう一方は史料学に基礎を置く歴史研究である。しかし、双方の真骨頂は他方のプログラムにもそれぞれインプットされており、両者の調停はけっして不能というわけではない。経験的データに基礎づけられた因果の把握は近代科学の真髄に通じるものである。

報告 3

近代オックスフォード大学の改革と古典学・人文学の位置 ——優等学士学位課程の変遷——

安原 義仁

16世紀におけるルネサンス新学芸の流入以来、オックスフォード大学の学問・教育の中核に位置したのはギリシア・ローマの古典であった。近代科学等の諸学問の勃興をみた19世紀には、大学における古典学・人文学の位置も再定位されることになるが、その再定位のプロセスとダイナミズムを、大学改革とくに学位試験制度改革の流れをふまえつつ、優等学士学位課程の変遷に焦点をあてて具体的に明らかにすること。これが本報告の意図したところであった。いわゆる科学の制度化・学問の制度化という観点から大学における諸学問の興亡と攻防をみてゆく際、一般には学部・学科・講座等に焦点が当てられるが、カレッジ制をとるオックスフォードの場合には教育課程・学位試験に目を向ける必要がある。むしろ諸学問の攻防をめぐる主戦場は教育課程とくに優等学士学位課程にあったといえる。

討論裁定を中心とした中世以来の学位試験制度に競争的性格と筆記試験の要素が導入され、学士学位に優等学位と普通学位の二種類が設けられたのは1800年に始まる一連の試験制度改革においてであった。この新制度の下では、優等学位試験合格者は成績にしたがっていくつかのクラスに分類されその氏名を公表された。成績優秀者の榮譽を顕彰することを通じて学生に勉学への動機づけを行い、大学教育の活性化をはかるといえるのがその眼目であった。

1802年に実施された最初の優等学位試験の内容はギリシア・ローマの古典と宗教の基礎を中心とするものであった。次いで1807年には新たに数学を中心とする第二の優等学位試験(Disciplinis Mathematicis et Physicis)が発足した。これに伴い最初の優等学位試験は古典学(Literis Humanioribus)と称されることとなった。オックスフォードの優等学士学位課程・試験(オナーズ・スクールと呼ばれる)においては古典学が先行したのである(ちなみにケ

ンブリッジでは数学が先行した)。

第三のオナーズ・スクールは1850年に自然科学と法学・近代史に設けられた。以後、オナーズ・スクールは東洋語(1896年)、英語英文学(1897年)、近代諸語(1905年)、地理学(1933年)というように、さまざまな学問分野に次々と創設されていった(1998年度の時点で計43を数える)。この間、1872年には法学と近代史が法学・近代史から分離・独立したし、1927年には自然科学は動物生理学、植物学、化学、工学、地質学、動物学へと分化している。また、哲学・政治学・経済学(PPE,1923年)や心理学・哲学・生理学(PPP,1949年)など、単一の学問領域ではなく複数の学問領域を組み合わせた複合優等学位課程も設けられていく。

こうして1802年以来次々に創設されていったオナーズ・スクールのうち、19世紀中を通じ専攻学生数の点で圧倒的な優勢と人気を誇ったのは古典学(Literae Humaniores, Lit.Hum.)のそれ(グレイツと略称される)であった。近代史も時代の進展とともに急速な伸びを見せており、世紀転換期頃には近代史が古典学に代わってトップの座を占めることになる。1923年の時点で学問分野別に大きく括ってみたとき、人文(arts)系専攻生は全体の66.8パーセントを占めており、これに社会科学(social studies)系を加えると実に84.4パーセントが人文・社会系を専攻していたのである。他方、純粋自然科学は一定の伸びをみせているが、応用科学や農学等の専攻生は微々たるものに過ぎなかった。

近代オックスフォードにおける古典学・人文学とりわけ古典学の比重は、学士学位試験制度全体の中においても担保されていた。優等学位と普通学位いずれの場合にも、学位取得にいたる過程にリスボンやモダレーションなどいくつかの中間予備試験の関門が設けられていて、その試験内容は主にギリシア・ローマの古典からなっていたのである。さらに、1864年まではどのオナーズ・スクール専攻生にも、当該分野での優等学位取得条件として、まずもって古典学の優等学位試験に合格しておくことが課されていた(compulsory Lit.Hum.)。ちなみに学位取得条件としてのギリシア語の必修が廃止されたのは第一次大戦後のことである。

新たなオナーズ・スクールの創設はまず、個々の教師あるいは一部の教師たちの提案から始まる。どのような学問に基づき、いかなる構造・内容のものとして構築するかというその構想・提案は、関係者たちとの協議・折衝・妥協を経て次第に固められ、最終的には全学の試験委員会ないし教務委員会において決定された。そして「試験規程(Examination Statutes)」に具体化されることになる。

どの学問領域にオナーズ・スクールを創設するか。近代オックスフォードにおいて、諸学問の攻防の最前線となり主戦場となったのはオナーズ・スクールであった。その攻防において古典学・人文学は圧倒的に優勢な位置を占めた。先行したのは古典学であり、規範・モデルとしての古典学は後続の他の学問分野に対し、しばしば「しぼり」、「くびき」としても作用した。だが同時に、先行ランナーは宿命として追われ攻められる者でもあった。

近代オックスフォードにおける古典学・人文学の位置について検討するに際しては、科学・技術など新興の学問の側からみていく必要があるし、また、研究理念の受容や研究体制の問題も視野に入れなければならないだろう。他大学の動向も無視できない。古典学・人文学による「支配の構造」やその支持基盤・社会的背景といった大きな問題もある。今後の課題である。

■ エッセイ

ドイツの大学における古代史研究

南川 高志（京都大学大学院文学研究科教授）

本研究会のニューズレター第1号（2004年9月28日発行）で、私はイギリスの3つの大学における古典学・古代史の研究について述べたことがあったが、今号の小文ではドイツの3つの大学を取り上げたい。紹介するのはハイデルベルク大学、テュービンゲン大学、そしてケルン大学である。先に紹介したイギリスのオックスフォード大学とケンブリッジ大学、そしてセント・アンドルーズ大学は、いずれも中世の創設にかかる伝統ある大学であり、とくに19世紀以前は、イングランドにはオックスフォード、ケンブリッジの両大学しかなかった。今回取り上げるドイツの3大学も、すべて中世に創設された。すなわちハイデルベルク大学が1386年、テュービンゲン大学が1477年、そしてケルン大学が1388年の設立である。ただし、ケルン大学はフランス革命後の1798年にフランスの占領下で閉鎖され、第一次世界大戦後の1919年、のちにドイツ連邦共和国の初代首相となるコンラート・アデナウアーがケルン市長の時に再開されたという歴史を持つ。3大学ともに中世以来の伝統を誇る大学であるが、ドイツには他にも古い歴史を持つ大学が数多く存在する。ただし、ドイツの大学の建物は、伝統校といえども、旧大学と呼ばれる部分を別にすれば、おおむね現代風の建築であり、オックスフォードやケンブリッジ、あるいはセント・アンドルーズの学寮（college）のような古さを感じさせない。

ところで、大学の3年になって史学科西洋史学専攻（当時）に進級した私は、初めて勉強することになった西洋古代史研究の基礎を、ミュンヘン大学で古代史を講じたヘルマン・ベングトゾンの『古代史入門』（Hermann Bengtson, *Einführung in die Alte Geschichte*, C.H.Beck/München, 7. Auflage, 1975）を読むことから学び始めた。1977年のことである。この書物は、古代史研究者なら誰でも知っているドイツの正統的な古代史入門書である。しかしながら、この書物に研究の歴史や道具立てを教えられた私が、実際にドイツの大学の古代史研究の現場を訪ねたのは、それから20年以上時を経た1999年が最初であった。そして、その時の訪問先がハイデルベルク大学だったのである。

ハイデルベルク大学の古代史研究は、哲学部に所属する「古代諸学のインスティテュート」でなされているが、私が訪ねたのはその中の「古代史ゼミナール」、より正確には「古代史と碑文学のゼミナール」である。学生時代以来元首政期ローマ帝国政治史を研究してきた私は、長年にわたってその著書・論文に親しんできたゲザ・アルフェルディ教授がこのハイデルベルク大学古代史ゼミナールに所属していたため、ぜひとも面会して話が聞きたかったのである。私自身からの依頼だけでなく、オックスフォード大学の知人が重ねて私の訪問を連絡してくれたこともあって、アルフェルディ教授は極東から初めて古代史ゼミナールを訪ねてきた一研究者を温かく迎えてくれ、ハイデルベルクでの古代史研究の現状や教授が率いている碑文データ・バンクのプロジェクト、『ラテン碑文集成』（CIL）の編纂などについて、英語で丁寧に解説してくれた。同教授はハンガリーから西ドイツへ亡命し、ラテン語碑文を用いた研究、とくにローマ帝政期の政治指導層に関するプロソポグラフィ的な研究で多大の成果を上げ、平易でかつ示唆多い書物『ローマ社会史』など膨大な量の著作を発表しつつ、長年にわたってドイツの最も伝統ある大学の古代史教授を務めてきた方である。しかし、そのようにはまったく思えないほど謙虚で温厚な学者であった。私のために若手研究者を集めて茶話会まで開いてくれたが、そこで私に急に話をするように求められたのには閉口した。

古代史ゼミナールは、他の古代学関係のゼミナールと同じように、ハイデルベルク市の旧

市街の中心部にある現代風の建物の中にある。すぐ隣には、厩と武器庫として建てられた細長い建物があるが、現在はメンザ（大学食堂）として使われていて、古代史ゼミナールで勉強する者にはすこぶる便利である。古代学関係棟の3階にある古代史ゼミナールの中心部分は、教授や教員の個室とプロジェクト用作業室、そしてゼミナール専用図書室からなり、図書室の奥に碑文専用の閲覧室がある。この図書室は規模的にはおそらくケンブリッジ大学古典学部図書室とほぼ同じくらいで、ロンドン大学古典学研究所図書室やオックスフォードのサクラ・ライブラリに比べれば蔵書の規模は小さいように見えるが、通常の勉強をするには充分である。

現在、アルフェルディ教授は退職し、ギリシア史のフリッツ・グシュニツァ教授（弓削達『地中海世界とローマ帝国』岩波書店、1977年で、V・エーレンベルクとポリスに関する論争をした学者として紹介されているので、ギリシア史専攻でなくともご存じの方も多からう）とともに名誉教授であり、現職の教授はヘレニズム時代を専門とするギリシア出身のアンゲロス・カニオティス教授と、アルフェルディ教授の後任としてミュンヘンから着任したばかりのクリスチャン・ヴィトシェル教授である。ほかに教員スタッフとして PD (Privatdozenten) が6名、助手的なスタッフや碑文データ・プロジェクトのスタッフが合計10名以上所属している。現職の両教授とも、歴史学研究ばかりでなく碑文学にも通じており、碑文を研究の重大な材料とし、またその関連のプロジェクトを実践している点が、ドイツの他の大学と際違った違いを見せているといえよう。2005年9月にハイデルベルクを訪ねた私は、初めてヴィトシェル教授に会って話をしたが、アルフェルディ教授在職中に教授室にかけられていた4枚の有名なローマ史研究者の写真、アルフェルディ教授が「4人の聖人」と呼んでいたR・サイム、E・バーリー、H-Gプロウム、A・アルフェルディの写真が、おそらくアルフェルディ教授の退職とともにであろう、取り外されていたのが印象に残っている。

さて、このアルフェルディ教授と並んで、ローマ帝政期政治支配層に関するプロソポグラフィ的研究で世界的に有名な学者が、2005年3月の本研究会の国際シンポジウムで基調報告をしてくれたヴェルナー・エック教授である。同教授の勤務するケルン大学の古代史研究はハイデルベルクと同様、哲学部の「古代学インスティテュート」に属している。教授が4名いて、このうちの1名がローマ共和政専門のカール＝ヨアヒム・ヘルケスカンプ教授であり、ローマの帝政期をエック教授が専門としている。ローマ史の両教授とも、先代のフリードリヒ・フィティングホーフ教授以来の伝統を受けて、ローマ社会の構造解明に余念がない。ケルン大学の古代史部門には、教授以外にPD3名、助手的なスタッフ6名がいる。同大学の古代史の図書室は古代史だけの施設ではないためか、ハイデルベルク大学の古代史ゼミナールよりやや広い。両大学の図書室とも学部学生の勉強にも使われるため、専門研究書や史料集だけでなく初歩的な書物や叢書も置かれている。

ヴェルナー・エック教授は、帝政期ローマ史の研究だけでなく、地元ケルン市の研究でも有名で、800頁を超える大著を近年出版しているが、主たる研究材料はラテン碑文である。ケルン市は、ローマ時代は大規模なコロニア（植民市）で、そのため豊かな考古出土物があり、大聖堂隣のローマ・ゲルマン博物館でそれらの多くを見ることができる。しかし、教授は書かれた記録を重視し、2500点以上にのぼるこの町から出土のラテン語碑文を積極的に活用する。もっとも、『ラテン碑文集成』(CIL)を全部読んだと噂される同教授の個人研究室にこの碑文集は見あたらず、そのことを尋ねると、教授はマイクロ・フィッシュで使用しているとのこと。京都大学にいられたときに私の部屋に設置されたCILを見て、日本の大学では個人研究室にCILがあると驚かれ、京都大学には他にまだCILが2セット設置され

ているというところに驚かれた。教授に「宝の持ち腐れ」と誤解されないためにも、私自身はともかく、京都大学の学生諸君がエック教授なみにモムゼン以来のこの大碑文集を使って研究してくれることを望んでいる。

ハイデルベルクとケルンの2つの大学の研究で、古代ギリシア・ローマ人が残したギリシア語とラテン語の碑文が古代史研究の重要な素材となっていることを紹介したが、これは決して一般的なことではない。ドイツの大学で古典学や古代史を学ぶ者にとっては、ギムナジウム（大学進学を目指す者が学ぶ中等教育機関）の教員となることが重要な一つの進路である。そのために、古典語に通じ、古典文学作品に親しむことが大切な課題となっている。教育上、碑文よりも文学作品を重視する方が一般的であるし、そうあるべきだと私に語ってくれたのは、2005年9月に初めて訪問したテュービンゲン大学の古代史部門のスタッフである。

テュービンゲンは今年のワールドカップ・サッカー大会が開催されるシュトゥットガルト市から南へ急行電車で45分ほどの大学町で、小さな、たいへん美しい町である。ケプラー、メランヒトン、ヘーゲル、シェリング、ヘルダーリンら数多くの有名人が学んだことで知られている。見所多い旧市街から北に向かって走るヴィルヘルム通り沿いに大学の建物が並ぶ。その中のヘーゲルバウと名の付いたコンクリートのやや殺風景な建物に「歴史学ゼミナール」が入っている。テュービンゲン大学では古代史の研究と教育が「古代学」の組織ではなく、「歴史学」の一環としてなされているのである。「歴史学ゼミナール」には古代史部門、中世史部門、近代史部門、同時代史部門、東ヨーロッパ史と地域史のためのインスティテュートなどが属している。古代史部門は2教授、すなわちローマ史と古代末期の歴史叙述が専門のフランク・コルプ教授とギリシア史や初期ビザンツ史が専門のミーシャ・マイヤー教授が所属し、Akademischer Rat という肩書きの上級スタッフ2名と3名の助手的スタッフが勤務している。コルプ教授は、私が現在、桑山由文氏と井上文則氏とともに翻訳・訳注の作業をしている古代末期に書かれたローマ皇帝たちのラテン語による伝記集『ローマ皇帝群像』(Historia Augusta)の重要な研究者である。ここテュービンゲンの古代史部門では、碑文よりも文学作品が研究の第一の素材なのである。

整った古代史の専用図書室で目に付いたのは、教員が自身の授業に関連する参考文献を集めて並べた棚があることである。現在の京都大学大学院文学研究科や文学部での私の特殊講義のために私が同じことを実践するのは、参考書の冊数の点でも学生の数を考えても容易ではないが、学生にとっては明らかに有用であり、将来文学研究科教員全体で考える余地はあるように思われた。

ヘーゲルバウの古代史部門が置かれた階には、専門図書室の脇に教員の個人研究室や秘書の作業室が並んでいて、2日間の滞在中、私はマイヤー教授やヘルムート・ブルム博士と懇談したが、図書室で勉強している私に彼らが毎日コーヒーを入れてくれたのには恐縮した。食事の折にはドイツで古代史を勉強している学生の就職の問題などにも話は及んだが、東西ドイツの統一がもたらした複雑な問題が大学や学生にも様々に影響していることも、彼らの話から知ることができた。

テュービンゲンの町には、11世紀頃に起源を持つホーエンテュービンゲン城が高台にある。この城は16世紀頃に今のような格好になっただけで、古代史を学ぶ者にはたいへん興味深い博物館がある。大学の考古学部門の研究施設になっている博物館で、ギリシア・ローマの出土物が実に丁寧に展示されている。この町にはハイデルベルクよりもずっと多くの古書店があるが、私の2005年の短い滞在ではほとんど見ることができず、残念だった。

ハイデルベルク市の人口は13万人少々で、イギリスのオックスフォード市とほぼ同じ。

チュービンゲンは人口8万5千人ほどで、ケンブリッジ市の10万少々よりもさらに少ない。ドイツの他の有名な大学町も、フライブルクが20万人でやや多いのを別にすれば、ゲッティンゲンが13万人ほど。マールブルクは7万5千人に過ぎない。いずれにしても、イギリスのオックス・ブリッジとそう変わらぬ小さな都市であり、伝統ある大学を抱えた町としては人口100万人を越える大都会ケルンは例外であろう。ただし、少ないのは都市の人口のことであって、ドイツの大学はどこも今、学生数の多さが悩みの種になっている。教授との面会可能時間に合わせて、教授室の前の廊下に置かれた椅子に座り、一人ずつ呼ばれて入室するまでノートを見ながら待つ学生の列をしばしば見かけた。それは、オックスフォードの個人指導（いわゆるテュートリアル）とは異なる雰囲気、なにやら病院の待合いのごときのものであり、人文学の理念とはややかけ離れた印象を受けた。

以上、3つの大学について簡単に述べてきたが、ドイツの大学のホームページはどこも丁寧で、教員の業績紹介も詳しくなされている。ドイツの古代史研究者の大学別所属リストを収めたホームページもある。留学や在外研究を考えている方には、拙文よりもそうした情報源の方がはるかに有益であろう。ただ、そうしたホームページなどが与える情報と実際の研究現場の雰囲気とは必ずしも一致しないと私は感じている。しかも、人文学の場合、研究機関の機能ばかりでなく、大学の置かれた町の空気も研究に微妙な影響を与えるような気がする。しかし、そうしたところまで留学希望者や在外研究予定者が事前に情報として得ることはなかなか難しい。留学経験者からの情報にも個人差がある。もし私自身が大学院生の昔に戻って、これまで紹介してきたイギリスの3大学とドイツの3大学のどこかに留学することを考えるとしたら、大いに迷うことになるであろう。結局、ともかくどこかで一度学んでみて、本格的な在外研究は2度目の留学からとするのが一番利口かもしれない。

ヨーロッパ図書館探訪

——アウグスト侯図書館（ヘルツォーク・アウグスト・ビブリオテーク）——

佐々木 博光（大阪府立大学人間社会学部助教授）

I. ヴォルフエンビュッテル——図書館のある町——

ドイツ連邦共和国ニーダーザクセン州第二の都市ブラウンシュヴァイク（第一の都市は州都ハノーヴァー）の駅前からバスに乗り、一路東南に向かう。典型的なドイツの風景、放牧地と森を抜けて15分ほど走るとヴォルフエンビュッテルの町に入る。ヴォルフエンビュッテルは観光ガイドにも紹介されることがなく、日本での知名度は低い、徒歩で一巡できるこぢんまりとした町で、六百を越える木組みの家並みを観ることができる、まさに日本人好みの町である。人口5万5千人のこの町の住民のご自慢は、イエーガー・マイスターという名のクロイター・リキュールと、人口を越える巻数の書物を擁し、かつてはライプニッツやレッシングといった著名な文人が館長を務めたこともあるヨーロッパ有数の図書館の存在である¹。1432年から1754年までブラウンシュヴァイク・リューネブルク侯が居城（レジ

¹ 現在のほぼ100万巻にのぼる蔵書のうち、1850年以前の印刷本がおよそ41万5000巻を占め、そのうち特に価値の高い揺籃期印刷本（インキュナブラ）が3500巻、世紀ごとの内訳は16世紀の印刷本が7万5000巻、17世紀の印刷本が15万巻、18世紀の印刷本が12万巻である。*Herzog August Bibliothek. Ein kulturelles Gedächtnis mit Profil, S. 2.* 中世来書物は貴重品として扱われ、表紙にも贅が凝らされた。したがって、表紙を節約する目的で数冊の書物

デンツ)を構えていた、その居城周辺にこの町の見所が集まっている。文芸をこよなく愛し、その保護育成に心を砕いた歴代侯が手塩にかけた図書館、最大の功労者の名を冠したこの図書館はそのなかでもひとときわ目を引く存在である。

II. 近世の諸侯図書館

ヴォルフエンビュッテルの図書館はブラウンシュヴァイク侯ユリウスによって 1572 年に創立された。しかし、この図書館を名実ともにヨーロッパでも有数の図書館に押し上げたのは小アウグスト侯 (1579-1666 年) の功績である。彼は書籍の収集を知的な狩猟とたとえ、それは本物の狩猟に勝るとも劣らない楽しみであるといった。彼はつねに古写本の所在、新刊の出版にかんする「情報に渴えていた」。情報収集のために彼は中欧の枢要な都市に「仲介人」や「仲買人」をおくという方法をとった。たとえば、ニュルンベルクではゲオルク・フォルステンホイザーが、アウクスブルクではヨーハン・マルティン・ヒルトが、パリではアブラハム・ドゥ・ウィッケフォールがこの任に当たっていた。さらにローマでは著名なイエズス会士アタナシウス・キルヒャーが重要な情報提供者の役を務めた。こうして、アウグスト侯はその生涯に 3 万 1298 巻 (うち手稿が 2891 巻)、各巻に合冊されている書物で計算すると計 13 万 5440 冊の本を集めた²。アウグスト侯は書物への関心がたたったのか、眼を患っている。仲買人フィリップ・ハインホフファーに宛てた視力の低下を訴える 1630 年の手紙が残っている。アウグスト侯はハインホフファーの故郷アウクスブルクにヨーハン・ヴィーゼルという名のすぐれた眼鏡職人がいるといううわさを聞きつけ、眼鏡を注文するよう彼の仲買人に依頼している。当座は眼鏡でしのいだが、だんだんそれも難しくなり、1653 年 3 月 11 日、ついに彼はブラウンシュヴァイクの一介の眼科医にして石工であったヨアヒム・シュミットの眼科手術に快癒の望みを託した。3 月 21 日にはシュミットに成功報酬として 100 ライヒスターラーが支払われている³。

その後の蔵書の拡大を簡単に振り返っておきたい。プロテスタントの領邦で実施された修道院の収用の結果、諸侯図書館は行き場を失ったかつての修道院蔵書の受け皿となった。さらに 1810 年にはヘルムシュテットにあった領邦の大学の廃校にともない大学図書館のおびただしい書籍が流入したのも蔵書の拡大を促した。近いところでは戦後、第 24 代館長エアハルト・ケストナー (1950-1968 年) の発案で『画家の書』*Malerbuch* とよばれる作品群の購入が精力的に進められ、いまではこのジャンルのコレクションを展示するためのコーナーも館内の一角に設けられている⁴。

また蔵書の拡大とともにその整理と目録の作成が喫緊の課題となった。目録の作成はすでに 17 世紀の初頭から行われており、6 冊合計 7200 頁の目録を歯車によって回転させる書見

を合冊して製本するのがふつうであった。この慣行は 16 世紀以降の印刷本の時代にも受け継がれた。管見の限りでは 18 世紀にもこの慣行は続いている。いっぺんに百冊も合冊するような大型本も珍しくはなく、したがって、図書館の所蔵する書物の正確な冊数は不明である。ライプニッツは図書館が現在の場所に設営された 17 世紀から数えて 5 代目の館長 (在任期間、1691-1716 年)、また、レッシングは 9 代目の館長 (在任期間、1770-1781 年) である。Bepler, Jill, *The Herzog August Library in Wolfenbüttel: Foundations for the Future*, in: *A Treasure House of Books: The Library of Duke August of Brunswick-Wolfenbüttel (Ausstellungskataloge der Herzog-August-Bibliothek 75)*, ed. by Schmidt-Glintzer, Helwig et al., Wiesbaden 1998, p.26.

² Härtel, Helmar, *Duke August and his Book Agents*, in: *A Treasure House of Books*, pp. 105.

³ Bepler, Jill, *Cultural life at the Wolfenbüttel Court 1635-1666*, in: *A Treasure House of Books*, pp. 140.

⁴ *Herzog August Bibliothek*, S. 4ff.

台Bücherradも登場する。この書見台は常設展示室の逸品として現在も観覧に供されている。目録の最初の頁には当時採用された20種の書物の分類がラテン語で記されている。それによると、1.神学、2.法学、3.歴史、4.軍事、5.政治学、6.家政学、7.倫理学、8.医学、9.地理、10.天文学、11.音楽、12.物理学、13.幾何学、14.数学、15.詩学、16.論理学、17.修辞学、18.文法学、19.学問討論、20.証書となっている⁵。番号は当時考えられた各分野の重要度に対応しているのであろうか。

III. 図書館と歴史補助学

現在ドイツの大学の歴史学科には「歴史補助学」Historische Hilfswissenschaftという授業科目がある。これには古文書学、年代学、系図学、紋章学、地名学、古銭学などがふくまれるのだが、そのそれぞれが発展の緒については近世のことであった。アウグスト侯図書館の歴史補助学への貢献は計り知れない。たとえば、1756年ごろにF.A.クニッテルがここで発見した再録羊皮紙(パリンプセスト)がその後の再録羊皮紙研究の発展にとって画期的な意義をもったことが知られる⁶。

多くの書物のなかに読者による欄外への書き込みが見られる。近年ではこれを利用した読書態度の研究もはじまりつつあるという⁷。本がどのように読まれたのかを研究するのである。筆者はこの動向にまだアクセスできていないが、プロジェクトが順調に立ち上がれば、学術・教育史研究に重要な知見をもたらす可能性を秘めている。このような研究が計画できるのも豊富な書物あってこそその賜物である。しかし、図書館員たちはけっして物量に胡坐をかいているわけではなく、最新の設備を採り入れ、開かれた図書館の手本となっている。たとえば、デジタル化の波にも遅れをとってはいない。所蔵図書オンライン化は一部の古写本をのぞく90%以上がすでに完了し、実用に供されている。また、アウグスト侯図書館は貴重な追悼説教集成Leichenpredigtsammlungenを豊富に所蔵しており、そのデータベース化にもいち早く成功している⁸。今後はこのデータベースを利用した近世文化史研究の進展が待たれるところである。

IV. 夢の棲家

アウグスト侯図書館のあるニーダーザクセン州は学術研究の州を自負しており、ドイツでもトップクラスの大学ゲッティンゲン大学を抱えるだけでなく、マックス・プランク研究所の各種研究機関も集中している。アウグスト侯図書館の運営にニーダーザクセン州の文教予算は欠かせないが、予算は上述の各種機関に分散してしまうため必ずしも十分ではないという。公的予算の不足を補っているのが地域の篤志家らの寄付である。しかし、寄付をしているのは地元の人たちばかりではない。寄付申込者の網は遠く外国にまで広がっている。アウグスト侯図書館はさまざまな人たちが夢を託した場所なのである。昨夏一ヶ月余ここで研究に従事する機会を得た。夢の重さを実感することのできる日々であった。

⁵ 目録作成の発展については、Katte, Maria von, Herzog August und die Kataloge seiner Bibliothek, in: *Wolfenbütteler Beiträge* 1, 1972, S. 168-99.

⁶ 元の文書を消し、その上からあらたな文書を記した羊皮紙が再録羊皮紙である。この羊皮紙には7世紀か8世紀の書体でヴルフィラ(4世紀の西ゴート人の司教)のゴート語訳聖書があらたに書かれている。Bischoff, Bernhard, *Paläographie des römischen Altertums und des abendländischen Mittelalters*, Berlin 1986², S. 27.

⁷ *Herzog August Bibliothek*, S. 4.

⁸ *Herzog August Bibliothek*, S. 10.

■ 今後の予定

◆ ジョン・パタソン博士 (Dr. John R. Patterson) 講演会

日 時 : 2006年3月4日(土) 午後3時30分~5時30分
場 所 : 京都大学大学院文学研究科・新館2階第4講義室
講演者 : ジョン・パタソン博士 Dr. John R. Patterson
(ケンブリッジ大学古典学部講師、モードリン・カレッジのフェロウ)
講演題目 : The relationship of the Italian ruling classes with Rome:
friendship, family relations and their consequences
討論コーディネーター : 藤井 崇 (京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

*なお、ご出席くださる方には事前に講演原稿を添付ファイルか郵便でお送りいたしますので、電話かメールにてご連絡くださいますようお願いいたします。

◆ 国際セミナー「ヨーロッパ中世における「過去」の表象と記憶の伝承 ——領邦・修道院・都市の歴史叙述を中心に——」

*詳細は裏面(14頁)をご覧ください。

《後記》

立春とは名ばかりの厳しい寒さが続いております。皆様におかれましては、お変わりなくお過ごしのことと拝察申し上げます。ニューズレター第6号をお届けいたします。

研究会大会には多くの方々にご参加いただき、心よりお礼申し上げます。引き続き3月初旬にはジョン・パタソン博士講演会ならびに国際セミナーを開催いたします。皆様にはご多忙の時期をお迎えのことと存じますが、なにとぞご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(阿部)

《お詫びと訂正》

ニューズレター第5号(2005/10/1発行)に間違いがございました。

ここにお詫びし、訂正いたします。

- ・(8頁) 佐々木博光氏(大阪府立大学間社会学部助教授)
→佐々木博光氏(大阪府立大学人間社会学部助教授)
- ・(8頁) 金澤周作氏(河村学園女子大学文学部専任講師)
→金澤周作氏(川村学園女子大学文学部助教授)

EUROHUM 研究会事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科西洋史研究室(担当:阿部)

Tel/Fax : 075-753-2791

E-mail : eurohum-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

URL : <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurohum/>

国際セミナーのご案内

ヨーロッパ中世における「過去」の表象と記憶の伝承

— 領邦・修道院・都市の歴史叙述を中心に —

日 時：2006年3月11日（土曜日）午後1時～午後5時30分

会 場：京都大学大学院文学研究科・文学部 新館大会議室（地下）

参加費：無料

プログラム

【開会の辞・趣旨説明】 服部 良久（京都大学大学院文学研究科教授）

【基調報告】

ペーター・ヨハネク（ミュンスター大学・比較都市史研究所所長）

「中世後期のドイツにおける過去の叙述と表象」

【コメント】

1. 徳橋 曜（富山大学助教授）

「記憶とアイデンティティ—中世都市イタリアの都市年代記—」

2. 青谷 秀紀（神戸大学大学院助手）

「君主の記憶、都市の記憶—中世後期フランドルの歴史叙述と記憶文化—」

3. 轟木 広太郎（関西大学非常勤講師）

「中世フランスの歴史叙述—比較の視点から—」

【全体討議】

コーディネータ 服部 良久

【閉会の辞】 服部 良久

基調報告は英語で行われ、参加ご希望の方には事前に原稿を添付ファイルでお送りします。また当日には邦訳原稿を配布します。討論では英語、日本語、ドイツ語が使用可。なお英語の通訳が付きます。閉会后、懇親会を行いますので自由にご参加下さい。